

上田官治と地域福祉概念の形成

—地域福祉と福祉風土の発想と源流—

○ 日本福祉大学 永岡正己 (000789)

キーワード：上田官治、福祉の風土、地域福祉概念

1. 研究目的

上田官治（1900-1978）は1960年代から70年代後半にかけて日本生命済生会の「地域福祉」編集主幹として活躍し、日本で初めて「地域福祉」を冠した専門雑誌である「地域福祉」や「地域福祉研究紀要」（のち「地域福祉研究」）刊行にあたった。

上田の地域福祉の発想には、社会福祉を横断する範囲と、社会福祉思想の根底を捉える広いものがあり、それはまた福祉風土への着目にもつながっていた。日本の地域福祉の概念はコミュニティ・オーガニゼーション論、地域福祉活動論としては社協を中心として早くから表れ、牧賢一、岡村重夫らの議論があったが、社会福祉のあり方として包括的に捉えたものは、上田による提起が最も早いものであったと考えられる。

本報告では、上田官治がどのような歩みを辿って地域福祉実践と思想に至ったのかを検討し、その上で、上田の地域福祉論を、彼のそれまでの経験や、川村一郎、柴田善守、岡村重夫らとの交流を検討しつつ、上田の地域福祉概念の先駆的意義について論じる。またその舞台となった日本生命済生会の地域福祉概念形成への働きと彼の役割を取り上げる。

2. 研究の視点および方法

上田官治の地域福祉の思想と概念がどのように形成されたかを、歴史研究の方法にもとづき、その著書、生涯に関する一次史料を用いるとともに、「地域福祉」（日本生命済生会社会事業局、当初月刊、のち72年より季刊）各号等の内容分析にもとづいて検討する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、史料類に関しては、史実として必要な範囲に限定し、プライバシーに関わる内容に配慮する。

4. 研究結果

第1に、思想形成と地域福祉への前史として、戦後京都府における社会福祉と民生委員活動に関する業務経験、大阪福祉事業財団赴任後（1954年）における万世母子寮、さかえ学園長として大阪の民間社会福祉事業、大阪セツルメント研究協議会等への参加と交わりを通して地域福祉と差別問題への課題について実践的理解を深めたことは重要である。また、その後の「地域福祉」編集の基本になる視点や編集方法の前提に、戦前の教員時代の教育と文学の視点に立った活動の蓄積があったことが明らかとなる。

第2に、地域福祉概念と日本生命済生会（1924年設立、以下同会）の歴史的意義である。同会には設立時の使命にもとづいて1958年社会事業局が設置されるが、局長の川村一郎は翌年から池川清を招いて研究会を進め、研究シリーズを刊行した。その過程で関西を中心とした社会福祉研究者の協力が生まれ、ネットワークも形成された。そして柴田善

守が大阪ボランティア協会を設立する時には、川村一郎、高森敬久ら同会内部の人々の協力が大きな力となった。そのような蓄積の上に立って、同会は地域保健、社会福祉センター、地域福祉、ボランティアの視点を意識的に生み出そうとした。それは小河滋次郎を中心とする同会設立の使命と地域への視座を発展させようとするものであった。

第3に、同会と「地域福祉」刊行における上田官治の役割である。上田は1963年、「保健と福祉」創刊後に同会社会事業局の嘱託として編集主幹となり、同会のめざす方向を社会的に発信した。そして大阪社会事業の流域と同会の小河滋次郎らによる歴史的起点を再検証して、「地域福祉」の編集を通して、「各対策がタテ割」になり「有機的に動かされて」いない制度のあり方を克服し、「地域という共通の基盤にたって、もろもろの福祉の推進をめざ」すことを訴え（4巻6号巻頭言）、議論を幅広く組織していった。

第4に、それらの取り組みを経て、72年以降、上田を中心に社会事業局のスタッフ、編集委員会体制によって、各地の福祉風土、民俗のルポによる特集が組まれた。上田はさらに「福祉風土づくり」、「福祉風土記の草案」を示し、「自己の生活の場たる自然とその上に生まれた文化をもつ風土」に根ざすことの大切さを強調し、具体的な生活の基盤と風土、福祉文化、地域環境の視点の重要性に立って、地域福祉概念の提起を「地域福祉」（84年終刊）や「地域福祉研究紀要」（73年創刊）で行った。これらの上田を中心とする議論の展開は、今日に続く一つの方向を示すものであった。

5. 考察

日本生命済生会と上田官治の結びつきによって展開された「地域福祉」を拠点とする取り組みと、そこで発言した人々の働きの中から、地域福祉概念の一つの方向が築かれていったという側面は、地味ではあったが、戦後の地域福祉の理論的・思想的深まりにおいて重要な意味をもつものであった。それは政策として形成される方向に対して、生活の具体的な場からの、より根源的で包括的な提示であり、そこに福祉の風土の提起や福祉の民俗学的な視点の大切さが内包され、公私関係、自治、福祉教育などのあり方と関わって、地域福祉の日本における固有のあり方や概念枠組みに示唆を与えるものであった。

上田は多くの論文や随筆を書き、地域福祉論のテキストも執筆したが、その経歴や発想から、文人的で理論的とはいえない面があり、その後適切な評価がなされてこなかった。しかし、その発言は地域福祉の深みから課題を示し、地域福祉概念の一つの方向を示すものであった。それは柴田善守、岡村重夫、右田紀久恵、岡本榮一らの地域福祉論の展開との密接な関連をもつものと考えられる。岡村重夫もこのような議論の中で、「福祉と風土—民俗としての福祉こそ基底」（1976年3号）を論じて自らの原点であるもう一つの関心を深めていった。このような意味で、日本の地域福祉の概念形成に果たした日本生命済生会、「地域福祉」、上田官治の役割は、再評価されるべき重要な内容をもっている。

【文献】

『保健と福祉』『地域福祉』『地域福祉研究』各号、同会会史編纂室編『日本生命済生会70年史』同会、1998（矢野健治執筆、高森敬久、長門谷洋治、永岡正己監修）、ほか（当日資料を配布します）。